

「神はわれらと共にいます」井上隆晶牧師
イザヤ書 7 章 4～14 節、マタイによる福音書 1 章 18～25 節

①【ヨセフの苦悩】

アドヴェントの第三週となりました。今日はマタイの福音書からお話をしたいと思います。マタイが語るイエス様の誕生物語の主人公はマリアではなくヨセフです。天使はヨセフに現れ、救い主の誕生を告げ、イエスという名を与えることを命じます。それはこの福音書がユダヤ人に向けて書かれたものだからであり、イエス様こそダビデの子孫である救い主であることを伝えようとしたからです。

「母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。」（18～20 節）マリアとヨセフは婚約をしていました。当時のイスラエルの習慣では婚約中であっても法的には「夫婦」とみなされました。そんなヨセフにマリアが聖霊によって身ごもったことが知らされます。ヨセフは神を信じる者ですが、聖霊によって身ごもった証拠はどこにあるのでしょうか。今までそんな話を聞いたことがありません。ヨセフ自身も悩んだと思います。このことを公にすれば、周りの人からは他の人と関係して身ごもったと言われて、マリアは姦通罪として処罰されるでしょう。悩んだあげく彼が出した答えは「表ざたにしないで、ひそかに縁を切る」というものでした。「決心した」と書いていますから、それまでそうとう心が揺れたのだと思います。

②【神の言葉が私たちに確信を与えてくれる】

ひそかに離縁の決心をしたヨセフに、その夜、天使が夢に現れてこう言いました。「ダビデの子、ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」（マタイ 1：20～21）天使はヨセフに「ダビデの子ヨセフ」と言いました。ヨセフはダビデの子孫でした。しかしそのような血統を言ったのではなく、天使は「あなたは信仰者ダビデの子孫ではないか、勇気を出して神を信じなさい」と言ったのです。信仰というのは不信仰との闘いであって、恐れを感じるものです。夢は当時「神のお告げ」の手段でした。ヨセフはこの夢を夢として終わらせず、神の言葉として信じました。彼は、眠りから覚めると、主の天使が命じたとおり、マリアを妻として迎え入れ、イエス様の法的な父親となったのです。「眠る」というのは聖書では不信仰の象徴として使われる言葉であり、「目を覚ます」というのは神の言葉を信じるという意味です。だからヨセフは迷いから覚め、信仰に目覚めたということで

す。ヨセフに信仰を与えたものは、神の言葉でした。ヨセフは神の言葉によって、自分の判断をひっくり返し、勇気をもって前に歩き始めたのです。そこには恐れがふつきれたように感じられます。

●日本YWCAの機関誌に刀祢館（とねだち）美也子牧師のこの箇所のメッセージが載せられていました。「ユダヤで父が子どもに名付けるとは、その子を確かに自分の子として認めることを意味します。当時のユダヤ社会で、姦淫の罪を犯したとされる女性を受け入れることは決して寛容とはとられず、そのような夫や婚約者もまた、神に背く罪人と見なされました。…彼がマリアと共に生きることによって被る不利益の大きさを考える時、彼は単なる優柔不断な優しいだけの男であると見なすことはできません。むしろ、…自分の利害や名誉よりも、相手の置かれた絶望的な状況を見過ごすことができず、自分の庇護を必要としている、自分しか守ることのできない相手へ寄り添う生き方を選んだヨセフに、無私の愛の強さを感じずにはられません。ヨセフにとってマリアと共に生きすることは、罪人扱いと屈辱を共に負うことでした。しかしヨセフは、それこそが神の御心だと受け止め、引き受けたのです。」

ヨセフは神の言葉によって、強くなりました。神の言葉は人間を強くすることができるのです。

③【神はわれわれと共におられる】

マタイはこの出来事が、イザヤ書に書かれている「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。この名は、神は我々と共におられるという意味である。」（イザヤ 7：14）という預言がイエス様によって実現したのだと解釈しました。その昔、エルサレムの町が敵に包囲された時、アハズ王に預言者イザヤは「神が必ずエルサレムを守るから安心しなさい。不安なら何かしるしを求めなさい。」と言いました。しかしアハズはこんな状況なのに神など信じられるかといってしるしを求めませんでした。そんな不信仰なアハズに対し、神は一方的にしるしを与えたのです。それが「おとめが身ごもって男の子を産む」というものでした。同じようにマリアが身ごもってイエス様を産むことが、神がこの世界を守り、救うことのしるしだとマタイは解釈したのです。クリスマスの出来事は、私たち人間の不信仰、罪深さにも関わらず、神は人と共にいてくださる出来事なのです。

私は以前、神は罪を犯したら、人から去ると思っていました。でもそうではないと思うようになりました。神が去ったらどうやって人は清くなれるのでしょうか。汚れた洗濯物に水が混じり合い一体になるからこそ、汚れが水に転嫁されるのです。医者が患者と共にいて、その幹部に触れなければどうやって患者は病気が治るのでしょうか。神が罪人と共におり、罪人に触れてくださるからこそ人は清められ、癒されるのです。だからこそ神は罪人と共にいて下さるでしょう。神は人と共におられるのに、人間の方が神と共にいようと思わないので、神が共にいることが分からなくなるのです。そこで神は人となり、目に見える姿で共に歩むこと

を通して、神は人と共にいることを示そうとなさったのです。それがイエス・キリストなのです。イエス様は 30 年間黙って罪人と共に生活し、その後の 3 年間の宣教活動でも身分の低い人と共に食事をし、貧しい人、病める人、障害のある人、罪人の友となり、罪人と一緒に洗礼を受け、犯罪人の一人のようになって十字架にかかりました。彼はいつも罪人と共にいました。いなかった時はありませんでした。でもその時の周りの人たちは、まさか神が自分たちの真ん中に、いや隣におられるとは誰も信じませんでした。

●テモテの手紙に「わたしの最初の弁明のときには、だれも助けてくれず、皆わたしを見捨てました。…しかし、…主はわたしのそばにいて、力づけてくださいました。」(Ⅱテモテ 4:16~17) という箇所があります。曾野綾子さんはこの箇所についてこんなことを書いています。「人は悲しみの中でほんとうに出会うものだと私は思う。人間が神に出会うのも、多くの場合そういう時なのである。それは悲しみの中でこそ、人は本来の人間の心に立ち帰るからなのである。だから私たちはもしかすると、悲しさと寂しさの極みまで落ちなければならぬかもしれない。その時初めて、私たちは傍らに立つ神と会う。」

神は苦しい時にだけ人と一緒にいて下さるのではなく、実はいつも一緒にいてくださっているのですが、苦しみの中で初めて人は神が見えるのでしょう。人生はこの共にいる神に出会う旅、気がつく旅なのです。キリストはあなたと共に生まれ、共に食し、共に笑い、共に泣き、共に苦勞し、共に罪を負い、共に苦しみ、共に死なれ、共に復活して下さる方なのです。マタイ福音書では初めと終わりをこの「わたしはいつもあなたと共にいる」(マタイ 28:20) という言葉で囲んでいます。一緒にいてくださるキリストが見える私たちになりたいと願います。